

昭和40年代以降の国体切手の目打

永吉 秀夫



タイプA 第24回(1969年) 左右貫通・上下穴無し



タイプB 第27回(1972年) 左右貫通・上下1穴



タイプC 第28回(1973年) 上下貫通・左右穴なし

国体の記念切手は、1947年の第2回以来連刷形式での発行(5回までは封書額面4種、第6回以降は葉書額面2種)が定着していましたが、1967年の第22回からは封書額面の1種発行となりました。その点では「普通の記念切手」となってしまいましたが、マージンを色塗りとしたあたりに、特別な切手であることの名残が見られます。その後1972年からは再び葉書額面での発行となりましたが、その特別な形態は、昭和最後の年(1988年)まで維持されました。

この時期の国体切手には、製造面でも使用面でもあまり面白そうな要素などないように思われがちですが、面白さがないでもありません。前ページに示したのは昭和40年代の3種ですが、耳紙への目打穴の貫通様式が異なることは、どなたにでもおわかりいただけることでしょう。第22~24回がタイプA、25~27回と29回以降がタイプB、28回がタイプCとなっています。同じ年の切手に目打バラエティがあるわけではありませんが、1つのシリーズ切手の中でのこのようなバラエティは、収集の対象として面白いものです。理屈っぽいことが好きな方のために、これらの目打がどのように穿孔されたのかという話を続けましょう。

タイプAは、1966~67年発行の魚介シリーズを、縦横逆にした型式です。縦横2シート続きの4シートを製版した円筒状実用版を使ってロール紙に印刷した切手を、横2シート続きに切断してから、右図(1)のような針型を使って穿孔したものと推察されます。いわゆる「別工程橢型目打」ですが、昔の橢型目打と違って、打ち始めの耳紙上で1回余分に穿孔しているため、2シートとも左右貫通のシートとなります。針型のサイズは $a=28$ ミリ、 $b=38.5$ ミリです。

タイプBは、タイプAと比べて上下耳紙に余分な目打穴が1つあるだけの違いですが、その穿孔方法には大きな違いがあります。いわゆる「連続橢型」と呼ばれる目打型式で、ロール紙に印刷された切手に、印刷工程と同調して目打穿孔を行い、そのあとで1シートずつに切断して仕上げました。この連続橢型目打は、右図(2)のようなシート2列分に相当する目打針を植え付けた針型を使って穿孔しています。この二連式針型には(工程上の必然性はありませんが)両側に図の赤色で示したような余分な目打針が1本ずつ植え付けられていたため、出来上がったシートの上下耳紙に余分な目打穴が開けられることとなります。この二連式連続橢型目打は、昭和後期から平成時代にかけて、普通切手・記念切手を問わず、わが国のほとんどの切手の製造に使われました。

タイプCはタイプAと同様の「別工程穿孔橢型目打」ですが、目打の穿孔方向が違います。このサイズの切手をこの方向に穿孔するためには、「橢歯の長さ」(図(1)の a)として38.5ミリをもった針型が必要ですが、この時代の別穿孔橢型でこのサイズの針型が使われた例は他にほとんどありません。1975~76年の「船シリーズ」に全面的に使われたほかには、1971年「政府印刷100年」などで使われたのみです。国体切手でも、第28回に使われただけです。

